



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## うちの子は・・・

3年生の教室に出向き、子どもたちと短歌を楽しんだ。いくつかの短歌を紹介し、思い思いにお気に入りの歌を声に出して読みあつた。そして、どのような場面を歌にしたのか、その解釈を紹介したり、感じたことを出し合ったりした。

「うちの子は 甘えんぼうで ぐうたらで 先生なんとか してくださいよ」\*俵 万智の作品  
子どもたちに紹介した短歌の一つである。

子どもたちはそれぞれに、自分の生活に重ねて解釈を語り、感じたことを出していった。

「おうちの人はおこっていて、叱ってもどうにもならないから、先生に告げ口をしているんだと思う。」

「あきらめてるのところがう？うちなんかは、そうや。もう、しょうがないなあ、知らんわっていうように。」

そんな中、新しい解釈が登場した。それは、「子どものことをおこってもいなくて、あきらめてもいなくて、かわいくて仕方がないから、こんな言い方をしている。」というものだった。みんなはびっくりした。と同時に、もう少し説明してほしいと身を乗り出した。

その子の解釈はこうだ。「かわいくて、大好きで、仕方がなくて、でも人に自分の子どもを紹介するとき、自慢するような言い方になるのは恥ずかしくていやだから、だからそういうことで……。かわいいし、好きだけど、でもちょっと困るときもあるけどかわいい。だから許しているとか、いろいろな気持ちがまざっていて……。」

やがて、なるほど、そうかもしれないと教室の雰囲気は変わった。

文字だけを追うと、親が学校の先生に訴えているようなことばである。が、しかし、その場面を想像しながら声に出してみると違ってくる。おこったように言うこともできるし、あきらめているようにもできるし、そして、かわいくて仕方がないという気持ちを想像しながら言うことだってできるのである。

「なるほど、そういう感じ方もできるんだ、短歌っておもしろいね……。」

私からの指導は何にもなっていないような、そんな言葉を子どもたちに告げ、その場に区切りをつけて、また一つ、別の短歌の解釈をしていった。

鉛筆の持ち方、ことばづかい、持ち物など、ことあるごとにうまくできているか、大丈夫かと声をかけるのは、うちの子のことが大嫌いだからこらしめてやろうとしてするのは決してない。わかっているけれど、ついしてしまうのだ。そんな大人達のふるまいも、その向こうにある思いを察すると折り合いも付けられる。もちろんいやなことはいやなのだが……。あたたかく見守られている自分たちなのだと気づいていった一幕だった。